

ヒッタイトの神話・レリーフに見られる神 ハッティとフリの影響

目次

はじめに

1. ヒッタイト学史

1-1. ヒッタイト学前史

1-2. ヒッタイト学創始

1-3. ヒッタイト学の展開

2. ヒッタイト史

2-1. アッシリア商人居留地時代

2-2. ヒッタイト王国時代

2-2-1. 古王国時代

2-2-2. 新王国時代

2-3. 後期ヒッタイト時代

3. 「ヒッタイト」の中の異民族

3-1. ハッティ

3-2. フリ

3-3. カシュカ

4. ヒッタイトの神と神話

4-1. ヒッタイト神話

4-1-1. ハッティ起源のテリビヌ神話

4-1-2. フリ起源のクマルビ神話

5. 神々のレリーフ 岩の神殿ヤズルカヤ

5-1. 遺跡の構造と描かれた神々

5-2. ヤズルカヤの機能

5-3. ヤズルカヤにおけるフリの影響

5-4. ヤズルカヤと王の役割

結論

註

文献目録

はじめに

H.ヴィンクラーがトルコのボアズキョイで本格的な発掘調査を行い、そこがヒッタイトの首都ハットゥシャであることが証明されたのは1906年のことである。そしてこの「ヒッタイトの発見」からちょうど1世紀後の2006年、筆者はヒッタイトの人々が暮らしたまさにその土地、アナトリアにおいてヒッタイト学を学ぶ機会を得た。

大学でトルコ語を専攻している筆者は、これまで主に近現代トルコに関する授業を履修してきた。この大学での授業、そして留学先のアンカラ大学ヒッタイト学科での授業を通し、また1年間トルコで生活した中で筆者がもっとも強く感じたのは、現在トルコの大部分を占めるアナトリア半島は、古代から現在に至るまで、つねに多民族の混在する社会であったということである。ヒッタイトの首都ハットゥシャから出土したボアズキョイ文書により、ヒッタイト国内ではヒッタイト語のみならず、当時の国際語であったアッカド語、シュメール語、そしてルウィ語、フリ語、ハッティ語、パラ語と全部で7つの言語が使用されていたことがわかっている。ローマ、ビザンツに続いてアナトリアを支配するに至ったオスマン帝国では征服民であるトルコ人、土着民であるギリシア人、クルド人などが混在し、スルタンでさえギリシア人と結婚した。またオスマン帝国崩壊直前からトルコ共和国建国にかけて活躍した「新オスマン人」には数多くのクルド人が名を連ねた。トルコ共和国になってからは、ナショナリズムの流れの中でギリシアとの住民交換、クルド独立を求める勢力との抗争など、多くの民族的な問題を内に抱えてきた。

このように、現在「トルコ」と呼ばれる地と多様な民族の関係について考える機会を通し、筆者はヒッタイトに関しても漠然と「民族」というものをテーマに研究していきたいと考えるようになった。実際に調べていくと、ヒッタイトでは文字（楔形文字、象形文字）、宗教、神話、戦術、法に至るまであらゆる場面で他民族の影響を大きく受けており、なかでも宗教、神話においては「ハッティの国（＝ヒッタイト）の千の神々」と自称するほどにあらゆる神を外から積極的に受容し、崇拝していたことがわかった。

そこで本稿では、ヒッタイトの神をテーマとし、ヒッタイトにいた異民族のなかでも、特にハッティとフリに焦点をしばって、彼らの影響が宗教分野にどのように現れているのか、その意味、さらにはそれがどのように変化していったかを明らかにする。具体的には、まず第1章でヒッタイト学の歴史を、第2章でヒッタイトの歴史を概観する。民族、信仰というのは、短期間で変化するものではない。またこの時代、国の政治は宗教的な儀式、規定と不可分であった。よってヒッタイトが全体としてどのような歴史をたどったのか、その通史を把握する必要があるだろう。第3章ではヒッタイトに特に大きな影響を与えた異民族であるハッティ、フリ、カシュカについて述べる。第4章ではハッティ、フリ両起源の神話を分析する。ともに全訳し、登場する神やあらすじの共通点、相違点を探る。第5章では、ヤズルカヤの岩場に刻まれた神々のレリーフとその遺跡のもつ意味を考えたい。新王国時代は「国家に関わる神のほとんどがフリ化」していたといわれる。この時代、政治と宗教が切り離せない関係であったことは間違いないが、ではそれは具体的にどのような関係であったのだろうか。そしてそれはどのように変化していったのか。最後に結論では両者の神話とレリーフに共通される点とその解釈について筆者の見解を述べる。

1. ヒッタイト学史

1-1. ヒッタイト学前史

ヒッタイトの首都ハットゥシャは、現在のトルコ共和国の首都アンカラから東におよそ150km、ボアズキョイとよばれる村にある。初めてこの地について考古学的見地から記述をしたのは、考古学愛好家の私人 S.テクシェであった。彼は1833年から1835年に行った小アジア学術調査の報告書でボアズキョイの城壁跡について言及し、それを『小アジア旅行記』にまとめた。また、1893年には同じく私人の E.シャントルが同じ場所から数枚の粘土板を発掘している。

テクシェが言及した当時は、シャンポリオンのロゼッタ・ストーン解読や、ローリンソンの楔形文字解読などの華々しい業績のおかげで、ボアズキョイはあまり注目されなかった。しかし後に旧約聖書に登場する「ヘテびと」が北シリアから小アジアに存在したとの説が英人オリエント学者 A.H.セイスなどによって有力視されるようになったため、本格的な発掘調査が行われることになった。発掘は当初イギリスの調査隊によって行われるはずであったが、バグダート鉄道計画をめぐるドイツ、トルコ(当時はオスマン朝)の友好関係によって発掘許可はイギリスのセイスからドイツの H.ヴィンクラーに移された。

1-2. ヒッタイト学創始

1906年、独人アッシリア学者のヴィンクラーがボアズキョイでの発掘を開始し、膨大な粘土板が発見された。アッカド語で書かれた粘土板から、この地がヒッタイト人の首都であり、ハットゥシャと呼ばれていたことがわかった。翌年にはヒッタイト王ハットゥシリ3世とエジプト王ラメセス2世の間に結ばれた平和条約が見つかった。この文書はアッカド語の楔形文字で書かれていたが、当時すでにこの条約のヒエログリフ版がすでにエジプトのカルナック神殿で発見されていた。

また、粘土板には当時の国際語であるアッカド語のほかに、楔形文字で記された未知の言語、すなわちヒッタイト語がみとめられた。この解読に成功したのがチェコ人アッシリア学者のB.フロズニーである。彼は1917年『ヒッタイト人の言語、その構造と印欧語族への所属』を著し、ヒッタイト語が印欧語族であることを主張した。

1-3. ヒッタイト学の展開

フロズニーの後、1920、30年代にはF.ゾマー(ヒッタイト語・印欧語説を支持)、H.エヘロフ(ヒッタイトの楔形文書のコピーであるKUB(註1)の執筆)、A.ゲツツェ、J.フリードリッヒ(ヒッタイト語の文法書、辞書HW(註2)を執筆)、E.フォラー(楔形文字リストの執筆、ヒッタイト象形文字の解読に貢献)といったドイツの研究者が飛躍的な成果を遂げた。

トルコでヒッタイト研究が行われるようになったのは、トルコ共和国初代大統領アタテュルクの功績によるところが大きい。彼は1930年代初頭にトルコ歴史協会を設立し、ヒッタイトをはじめとする古代文明の研究者育成に乗り出した。欧米諸国に学生を派遣したほか、ナチス政権のドイツから亡命したシュメル、アッシリア、ヒッタイト学者をトルコに招いた。この時トルコに渡ったのがH.G.ギューターボック(印影のヒッタイト象形文字の解読、CDH(註3)の執筆)とH.Th.ボッセルト(ヒッタイト象形文字の研究、カラテペでフェニキア語の対訳碑文を発見)である。ドイツに留学し、ヒッタイト学者の第二世代に名を刻んだのはS.アルプであった。第二世代と呼ばれる研究者としてはボッサートを筆頭に、セダット、O.グルネイ(アンカラにイギリス考古学研究所を設立)、A.カンメンフーバー(フリードリッヒとともにHW²執筆)、H.オッテン(エヘロフの文書コピーを引き継ぐ)、仏人E.ラロシュ(ヒッタイト象形文字研究、フリ語、ルウィ語、リキア語の研究)、伊人P.メリッギ(ヒッタイト象形文字研究、象形文字ルウィ語研究)が挙げられる。

このように、ヒッタイト学の土壌はドイツで作られ、その後トルコやフランスにも広がっていった。現在ではイギリス、イタリア、アメリカにも研究機関がある。

2. ヒッタイト史

第1章では文献学としてのヒッタイト学がどのように築かれてきたか、またその成果を述べた。第2章ではその成果によって再構築されたヒッタイトの歴史を見ていくこととする。この章のはじめにヒッタイトの時代区分において述べておきたい。渡辺和子氏は、ヒッタイトの時代区分に関して以下のように述べている。

「ヒッタイト史はふつう古王国時代(前1680～前1450年ころ)と新王国時代(前1450～前1200年ころ)の二つに分けられるが、その間に中王国時代(前1530～前1330年ころ)を想定して、三つに分けることもある(渡辺1998)。」

いっぽう吉田大輔氏はこの渡辺氏の時代区分を挟む形でアッシリア商人時代(前20世紀～前18世紀)、後期ヒッタイト時代(前12世紀～前8・7世紀)を設定している(吉田2003)。前者は「ヒッタイト王国史」の時代区分であり、後者は「ヒッタイト人が歴史の舞台に登場した歴史」のそれといえよう。本稿では、ヒッタイトの民族的意味合いを重視する立場から、アッシリア商人居留地時代、後期ヒッタイト時代も対象に含め、考察していくこととしたい。また、ヒッタイト王国時代の時代区分に関しては、古王国時代と新王国時代に二つに区分する(註4)。

【ヒッタイトの時代区分】

アッシリア商人居留地時代 (前20世紀-前18世紀)	}	古王国時代(前1680-前1450) 新王国時代(前1450-前1200)
ヒッタイト王国時代 (前17世紀後半-前1200年頃)		
後期ヒッタイト時代 (前12世紀-前8・7世紀)		

2-1. アッシリア商人居留地時代

ヒッタイト人は初めからアナトリアに居住していたわけではない。彼らがいつ、どこから、どのような経路をたどってアナトリアに移動してきたかは定かでないが、遅くとも前 19、18 世紀ごろまでには移住していたと考えられている。

この頃のアナトリアは政治的には小国分立の状態であり、各地でアッシリアの商人が活躍していた。彼らは金、銀、銅、黒曜石などの鉱物資源を求めてアナトリアに入り、各地の為政者の許可を得たうえでカールムと呼ばれる居留地を形成し、交易活動を行っていた。アッシリア商人のカールムはアナトリアに 9ヶ所設けられていたが、その中で最も中心的な役割を果たしていたカールムがカニシュ(註 5)である。活発な交易活動の結果、ヒッタイトにはアッシリアの高度な文化がもたらされ、文字も伝えられた。ヒッタイト語が楔形文字によって表記されるのはこのアッシリア商人の影響である。

中央アナトリアの多くの遺跡で、アッシリアの層とヒッタイトの層に焦土層が見られ、アッシリア商人居留地時代は大規模な火災によって終焉したことがわかる(大村 2004)。この間ヒッタイト人とアッシリア商人の関係がどのように変化したかは明らかになっていない。

2-2. ヒッタイト王国時代

王国時代の通史を記述する前に、歴代王の年表を示しておきたい。

【ヒッタイト王国の歴代王】

アッシリア商人居留地時代末期	
ピトハナ (前 18 世紀)	
アニッタ (前 18 世紀)	ピトハナの息子
古王国時代 (前 1680-前 1450)	
ラバルナ (前 1680-1650)	
ハットゥシリ 1 世 (前 1650-1620)	ラバルナの養子 / 暗殺者
ムルシリ 1 世 (前 1620-1590)	ハットゥシリ 1 世の孫 / 養子
ハンティリ (前 1590-1560)	ムルシリ 1 世の姉妹の夫、暗殺者
ズィダント 1 世 (前 1560-1550)	ハンティリの娘婿
アムムナ (前 1550-1530)	ハンティリの息子
フズィヤ 1 世 (前 1530-1525)	アムムナの息子?
テリピヌ (前 1525-1500)	ズィダント 1 世の息子? / アムムナの姉妹の夫?
タフルワイリ	フズィヤの兄弟
アルワムナ	フズィヤの娘婿
ハンティリ 2 世	アルワムナの息子
ズィダント 2 世	
フズィヤ 2 世	
ムワタリ 1 世	
新王国時代 (前 1450-前 1200)	
トゥトハリヤ 2 世 (前 1450-1420)	
アルヌワンダ 1 世 (前 1420-1400)	トゥトハリヤ 2 世の娘婿
トゥトハリヤ 3 世 (前 1400-1380)	アルヌワンダ 1 世の息子
ハットゥシリ 2 世 (?)	
シュッピルリウマ 1 世 (前 1380-1340)	ハットゥシリ 2 世の息子
アルヌワンダ 2 世 (前 1340-1339)	シュッピルリウマ 1 世の息子
ムルシリ 2 世 (前 1339-1306)	シュッピルリウマ 1 世の息子
ムワタリ 2 世 (前 1306-1282)	ムルシリ 2 世の息子
ムルシリ 3 世 (前 1282-1275)	ムワタリ 2 世の息子
ハットゥシリ 3 世 (前 1275-1250)	ムルシリ 2 世の息子

トゥトハリヤ 4 世 (前 1250-1220)	ハットゥシリ 3 世の息子
クルンタ (?)	ムワタリ 2 世の息子
アルヌワンダ 3 世 (前 1220-1215)	トゥトハリヤ 4 世の息子
シュッピルリウマ 2 世 (前 1215-1200)	トゥトハリヤ 4 世の息子

(Dinçol 2004、McMahan 1989、大城 1979、渡辺 1998 をもとに作成)

新王国の一部を除き、年代の区切りは 5 年単位になっている。このことからわかるように、年代はあくまで目安としてみるべきであり、決定的なものではない。特に古王国時代の後半、および新王国時代初期(中王国時代とも呼ばれる)は不明な点が多く、王の即位の順序についてもなお議論が分かれている。

2-2-1. 古王国時代

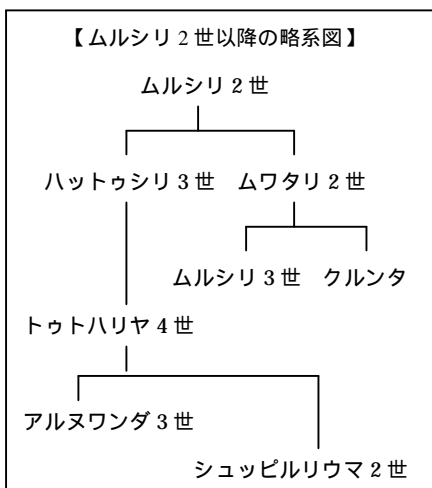
アッシリア商人時代の後半、クッシャラの王ピトハナはカニシュを征服、ついで息子のアニッタはザルパやハットゥシャを滅ぼしてアナトリア中央部を統一した。アニッタ以後の 100 年間のヒッタイト史に関してはほとんど知られておらず、アナトリアはなお小国分立の状態であったと推定される。やがてヒッタイト人を統一した初代の王、ラバルナ(註 6)(前 1680-1650 年ごろ)の名はのちにヒッタイト王の称号として用いられることとなった。後を継いだラバルナ 2 世(前 1650-1620 年ごろ)(註 7)はクッシャラからハットゥシャに遷都し、自らも新王都の名にちなんで「ハットゥシリ 1 世」と改名した。次のムルシリ 1 世(前 1620-1590 年ごろ)はバビロニアへ遠征し、バビロン第一王朝を滅亡させた(前 1595)。

ヒッタイト古王国時代は王位継承をめぐる争いが絶えなかった。ハットゥシリ 1 世はシリアへ遠征中に息子が謀反を企てたとして義子のムルシリ 1 世を後継者としたし、そのムルシリ 1 世もバビロニアから帰国後に義弟のハンティリ 1 世(前 1590-1560 年ごろ)に暗殺されている。前 16 世紀末に王位に就いたテリピヌ(註 8)(前 1525-1500 年ごろ)は勅令を發布し王位継承順位を定めた。テリピヌの死後、トゥトハリヤ 2 世が即位するまでの 50 年間についてはほとんど記録がない。

2-2-2. 新王国時代

ムルシリ 1 世の死後、王位継承問題で揺れたヒッタイトの領土は縮小する一方であった。北シリアにはフリ人のミタンニ王国が興り、特に南東部において著しく領土を失った。さらにエジプトのトトメス 2 世もカルケミシュまで勢力を広げていた。前 15 世紀中ごろに即位した出自不明のトゥトハリヤ 2 世(前 1450-1420 年ごろ)は、即位後すぐに北シリアへ軍を向け、キズワトナ、カルケミシュ、ハルパを支配下におさめるなど対外的に活躍し、王国の国力再建を図った。このころ王が絶対的な権力をもつようになったことから、帝国時代ともよばれる(渡辺 1998)。

その後アナトリアではアルザワ、アヒヤワといった小国が台頭し、ヒッタイトは再び混乱したが、前 14 世紀前半に即位したシュッピルリウマ 1 世(前 1380-1340 年ごろ)の活躍により、国力はより強固なものとなった。彼は北シリアのミタンニ王国を滅ぼして、カルケミシュとハルパの奪還に成功、ヒッタイトのオリエント世界における国際的地位を築いた。孫のムワタリ 2 世はシリアの覇権をかけてエジプト王ラムセス 2 世とオロンテス河畔のカディシュで戦い(前 1286 年ごろ)、引き分けている(註 9)。その後息子のムルシリ 3 世(前 1282-1275 年ごろ)が後を継いだ。ムワタリの弟で彼の叔父のハットゥシリ 3 世(前 1275-1250 年ごろ)は彼を王位から退けて即位し、カディシュの戦い以来冷戦状態にあったエジプトと平和条約を結んだ(前 1269 年ごろ)。



ハットゥシリ 3 世の後を継いだのは、彼の嫡男であるトゥトハリヤ 4 世である。彼は都ハットゥシャから北東約 2km に位置するヤズルカヤに壮大な岩の神殿を築いたことで知られる。この遺跡の詳細については第 4 章で詳しく述べるが、岩に刻まれたレリーフの神々のほとんどがフリ系であり、ヒッタイトにおけるフリの影響が如実に現れている。また彼はアラスィア(キプロス)を新たに支配下に治め、対外的にも活躍した。エジプト、ヒッタイト、バビロニア、アッシリアの 4 大国が台頭していた彼の治世において、ヒッタイトはエジプトと並ぶ強国であった(Akurgal 1997)。ただ、父のクーデターにより失脚したムルシリ 3 世の弟で、従兄弟のクルンタの存在はトゥトハリヤ 4 世にとって脅威であり続けたようだ。1986 年にハットゥシャの遺跡で、トゥトハリヤ 4 世が

クルンタに忠誠を誓わせた青銅製の文書が見つかっている。ムルシリ3世失脚後、ハットゥシリ3世はクルンタに忠誠を誓わせ、タルフンタツシャの王とした。が、法的にはムルシリ3世の正統な後継者である彼の存在は、ハットゥシリの後を継いだトゥトハリヤ4世にとっても不安の種だったに違いない。ハットゥシヤではこのほかに、「大王、ラバルナであるクルンタ」と書かれた印影も発見されており、どうやらクルンタは青銅版の誓いを破って、一時期ヒッタイトの王位に就いたようである。その後王位はトゥトハリヤ4世の嫡男であるアルヌワンダ3世(前1220-1215年ごろ)、シュッピルリウマ2世(前1215-1200年ごろ)に引き継がれた。しかしトゥトハリヤ4世の死後、アッシリアの台頭と西からの異民族の侵入により王国は急速に衰退した。ヒッタイトは「海の民」と総称される異民族集団の襲来によって滅亡したと言われていたが、彼らについて詳しい事はわかっていない。ヒッタイト滅亡後の中央アナトリアではゴルディオンを中心にリュギア人による王国(前750-300年ごろ)が築かれた。

2.3. 後期ヒッタイト時代

ヒッタイト王国が滅亡した後、南東アナトリアから中部シリアにかけてルウィ系の民族がカルケミシュ、メリド、カラテペ、クムフといったいくつもの都市国家を建設した。この時代を後期ヒッタイト時代(前12世紀-前7・8世紀)と呼ぶ。それぞれの都市国家の王はヒッタイト王シュッピルリウマ、ムワタリ、ハットゥシリ、ラバルナなどに因んだ王命を名乗って、ヒッタイト王国の末裔であることを誇示し、また王国時代から印章などに使われていたヒッタイト象形文字を用いて多くの石碑文、岩石碑文を残した。旧約聖書に登場する「ヘテびと」とは彼ら後期ヒッタイト人を指す。

3. ヒッタイトの中の異民族

ヒッタイトの歴史、文化を異民族の存在なしに語ることはできない。常に多民族が混在するアナトリアにおいて、ヒッタイト人は異民族のもつ知識や文化を積極的に吸収してきた。しかしいっぽうでは敵対し、王国を脅かす存在であった民族もいる。本章では特にヒッタイトに影響を与えたハッティ、フリ、カシュカの3民族について、ヒッタイトとの関係を中心に述べていきたい。

3.1. ハッティ

ハッティはヒッタイト人が侵入する以前からアナトリアに暮らしていた先住民である。彼らは少なくとも前3千年紀半ばからは王国、君公国を形成し、ヒッタイトがアナトリアを治めるようになってからも人口の大半を占めていた(Akurgal 1998)。ヒッタイト人は自分達の治めるところとなった国を「ハッティの国」と呼び、その呼称はヒッタイト滅亡後もアナトリアを指すものとして使用されていた。ハッティは宗教、神話、風習、習慣(法)など多くの分野でヒッタイトに影響を与えたが、特に宗教、祭儀の領域ではそれが顕著に現れている。テリピヌ神話、イッルヤンカ神話、空から落ちた月の神の神話などはハッティ起源である。彼らは固有の文字を持たず、その言語はコーカサス諸語との関連が指摘されているが、依然として解明されていない。ヒッタイトの王名となったトゥトハリヤ、アルヌワンダ、アンムナはハッティ起源の山の名であり、ハットゥシリはハットゥシヤのハッティ語、ハットゥシュからとられた。

3.2. フリ

前2千年紀、北メソポタミアを中心に活動した民族で、その一部は前1500年ごろミタンニ王国(首都ワシュカニ)を築いた。戦車と馬の調教において優位し、一時はエジプト、ヒッタイトと並ぶ大国となったが、シュッピルリウマ1世の侵攻によって領土は大幅に縮小、まもなく滅亡した。ヒッタイトとの誓約文書の中に印欧系の神々の名があげられていることなどから、以前は支配者層は印欧系とする説が広く流布されていたが、現在ではミタンニ王国は支配者層も含めてフリ人の国であるとする説が有力になっている(渡辺 1998)。

フリ人がヒッタイトに与えた影響はミタンニ王国との政治的な関係に留まらない。特に新王国時代になってからフリの影響は宗教分野に顕著に現れるようになり、国家に関わる神のほとんどがフリ系になっていた(岡田・小林 2000)とされる。またトゥトハリヤ2世の妻ニカルマティ、ハットゥシリ4世の妻ヘパトなど、王族にフリ系の名がつけられるようになった。

フリ人が多く住んだ北シリアはエジプトとの国境であっただけでなく、ヒッタイトとメソポタミア地域の間位置し、ヒッタイト人はより高度なメソポタミアの文明を、フリ人を通じて吸収していた。ボアズキョイでは、ギルガメシュ叙事

詩のフリ語訳とヒッタイト語訳、それぞれの文書が見つかった。言語は膠着語で前1千年紀のウラルトゥ語に近いとされる。

3.3. カシュカ

黒海沿岸一帯で活躍した民族で、言語系統や文化についてはわかっていないことが多い。たびたびヒッタイト領に侵入し、王国を脅かした。彼らをヒッタイトの滅亡の一因とする説もある(ピッテル 1991)。アルヌワンダ 1 世の時代に初めて彼らのヒッタイトに対する攻撃が記述されるが、それ以前から侵攻を受けていた可能性は大きい。トゥトハリヤ 3 世の時代には、彼らを含む多数の敵対する民族によって首都ハットゥシャが焼き払われた。ムワタリ 2 世は一時首都をハットゥシャからタルフンタツシャに移したが、それはカシュカの脅威が原因の一つであるとも考えられている(ピッテル 1991)。ムルシリ 2 世の時代に一度だけ王らしき者の名が記録されているが、これは例外的な事態であり、彼らは通常は部族間のゆるい連合体によって形成されていたと考えられている。ヒッタイト滅亡後、サルゴン 2 世の時代以降、この部族についての記録は途絶えている。

4. ヒッタイトの神と神話

ヒッタイト人が「ハッティの国の千の神々」と呼ばれるほど様々な神を崇拝していたこと、そしてその神々の多くがヒッタイト固有のものではなく、異民族から借用したものであることは既に述べた。本章ではそうしてヒッタイトに受け入れられ、崇拝された神々とその物語について述べる。

ヒッタイトの神話はアナトリア起源、フリ起源の二つに大別される。アナトリア起源の神話とは、ヒッタイト人が侵入する以前からアナトリアにいた住民のハッティ人から伝わったものを意味する。怪竜イッルヤンカの伝説や姿を消す神の神話などがあり、ホフナーは他の地域起源の神話に比べ単純、簡潔な内容と分析している(Karauğuz 2001)。いっぽうフリ起源の神話で最も有名なものは、天上界の覇権をめぐる神々の争いを描いたクマルビ神話である。この神話は後にフェニケを通じてギリシャにも伝えられ、クマルビはゼウスの父クロノスの名で語られた。そのほかヒッタイトにはバビロニアやカナーンの神話も伝えられたが、これらの神話はフリ人を介してヒッタイトに伝えられた。

4.1. ハッティ起源のテリピヌ神話

「姿を消す神」の神話は、ハッティ起源のヒッタイト神話で重要な位置を占めているが、テリピヌ神話はそうした数多くの「姿を消す神」の神話の中で、最も知られているものの1つである。Gカレルマンによれば、この神話は「古ヒッタイト」から「帝国時代」まで詠まれた(註 10)。ハッティ起源の神話の特徴は、それ自体が神話として独立したのではなく、宗教儀式の一部として詠まれたり、演じられたものであった点にある(Karauğuz 2001)。テリピヌ神話も祈祷、儀式、占いの際に詠まれ、強調されてきたからこそ、このように長期に渡って詠み継がれ、多くの文書の写しが取られることにもなったのであろう。

神話の本文は欠損部や独特の表現もあり、少しわかりにくいので、まず簡単にあらすじを説明したい。豊穡の神テリピヌがなんらかの理由で怒り、姿を消してしまったために、人、家畜は子を産まず、植物は枯れ、神も人も飢えに苦しむようになる。太陽神は宴を催し、千の神々を招待する。その中で、嵐の神は息子テリピヌがいなくなったことに気づき、神々はテリピヌの搜索を開始する。テリピヌはなかなか見つからないが、ついに女神ハンナハンナの送ったミツバチが彼を発見、彼の怒りを鎮めるための儀礼が繰り返し行われ、テリピヌは戻り、国には豊穡が戻る。

テリピヌ神話全訳(註 11)

§1

テリピヌは[甲高く叫んだ:]「そこに恐れるようなものは何もないように！」[そして]彼は、[右足の靴を]左足に、左[足の靴を右足に履いた]。

§2

濃い霧が窓を覆った。家を煙が[覆った]。炉の薪は消え、[祭壇にいる]神々は息を詰まらせた。囲いにいる羊たちは窒息した。牛舎の牛たちは窒息した。羊は子羊を拒んだ。め牛は子牛を拒んだ。

§3

テリピヌは立ち去った。そして(そこで)姿を消した。彼の上にはjalenzu(植物名)が育った。このため大麦(と)小麦はもう実らなかった。牛、羊そして人間はもはや妊娠しなかったし、妊娠しているものは出産しなかった。

§4

草は育たず山々は枯れ、木々も枯れた。国で亜麻が現れるように牧草地や泉は枯れた。人間たちと神々は飢えて死んでゆく。大いなる太陽神は宴会を催した。千の神々を招待した。彼らは食べたが満腹にならなかった。彼らは飲んだが、どの渴きは癒されなかった。

§5

嵐の神の頭には息子のテリピヌが浮かんだ。：「息子のテリピヌがここにはいない。彼は怒り、良きものを全てを持ち去ってしまったのだ。」大小の神々がテリピヌを捜し始めた。太陽神は速い鷲を送った。：「行け。高い山々を調べよ！」

§6

「深い谷を調べよ！青い波(の深いところ)を調べよ！」鷲は行った、しかし彼を見つける事はできなかった。ただしその鷲は太陽神にある知らせを持ってきた(戻ってきた)。高貴なる神テリピヌ様を見つけられませんでした。」嵐の神はハンナハンナへ：「どうすればよいのだろう。我々は飢え死にしよう」と言った。ハンナハンナは嵐の神へ：「ああ、嵐の神よ、何かやりなさい。テリピヌを自分自身で見つけ(に行きな)さい」と言った。

§7

嵐の神はテリピヌを捜し始めた。(嵐の神は)町の門にやってきたが開けることができなかった。嵐の神はその門と錠(?)を壊した。彼は身支度をして、(地面に)座った。ハンナハンナは[一匹のミツバチを]送った。：「行け！テリピヌをお前が捜すのだ！」

§8

[嵐の神はハンナハンナへ]：「大小の神々が彼を探し始めてから今まで彼を[見つけられなかった]。このミツバチが彼を見つけるのか？こいつの羽は小さいし、こいつ自身も小さい、それにこいつは...」と行った。

このあと約 15 行欠損。

§9a

[]

§9b

そして悪しきものは[]

§9c

テリピヌは[]。麦芽とビールの食べ物を[]。彼は...した。彼は神々を(?)門で[]別れる。そなたテリピヌは尊敬(の念をもって)[懇願するにちがいない]。失望することがあってもよくなった[にちがいない]。

§10

[]の水はここで流れる。ああ、テリピヌ、おまえの魂、[]このように王への恩恵の中に戻れ。

§11

ガラクトル(植物名)が供えられた。[ああ、テリピヌ、そなたの魂が]静まるように。parjuenaš(植物名)の実が供えられた。その実(?)が彼へ(テリピヌへ)懇願す(るように)。

§12

šamama(植物名)のナッツ(?)が供えられた。[]明らかになるように(?)。イチジクの木々が供えられた。[イチジクが]甘いように、テリピヌ、おまえの魂も同じように甘くなるように。

§13

オリーヴの粒の中には油が[隠れている]のと同様に、葡萄の粒の中にはワインが隠れている。テリピヌ、そなたも同じように心にそして魂に、慈悲が隠れているように。

§14

見よ、樹皮のある木が供えられた。テリピヌの魂に油を塗るように。麦芽とビールの食べ物が魂において(調和され溶かされながら)混ぜ合わされたように、[テリピヌ]そなたの魂も同じように、(この)人間たちの(死人たちの)言葉によってひ

とつになるように。[小麦が]傷んでいないのと同じようにテリピヌの魂も同じように清いものであるように。蜜が甘いように、油がやわらかいように、テリピヌの魂も同じように甘くあるように。同じようにやわらかくあるように。

§15

見よ、私は美しい匂いのする、だがうすい香油をそなたテリピヌの道へまいた。テリピヌよ、すばらしい匂いのするうすい香油がまかれた道へ出よ。šahiš と ĩappuriišaš (木の枝々) が美しくあるように。葦(と)...が素晴らしいものであるように、そなたテリピヌも同じように素晴らしくあれ。

§16

テリピヌは怒ってやって来た。彼は稲妻とともにがなり、(稲妻は)地上で暗闇の地にぶつかる。カムルシェパは彼を見、そして鷲の翼[でもって(?)]自ら行動を起こした。彼は怒りを静めた。彼は腹立ちを静めた。彼は罪悪を押しとめ、かれは興奮を静めた。

§17

カラムシェパは神々へ(次のように)言う。:「さあ、神たちよ、行きなさい! 神ハパンタリのために太陽神の羊たちを追うのだ。テリピヌの karaš (穀物の名)を我が改良できるように 12の雄羊を選べ。我は千の穴のある籠(ふるい)を自分用に手にした。そして彼の上に我は karaš と“カラムシェパの雄羊”をまいた。

§18

そして我はテリピヌの上で、そこかしこで火を焚いた。(繰り返し)そこかしこで火を焚いた。そして彼の悪徳をテリピヌの体から取った。彼の罪悪を取った。彼の怒りを取り払った。彼の不機嫌も取り払った。彼の腹立ちも取り払った。

§19

テリピヌは怒っている。彼の心(?)と魂は、燃料の薪(のように)苦しんでいた。燃料の薪をどう燃やそうと、テリピヌの怒り、憤激、罪悪そして腹立ちも同じように燃えて終るように。[そして]麦芽が無用になったことから、彼らは野(畑)へ彼を連れて行かない、そしてそれらを種として使わない。彼らがパンの中でそれを使わないように、そして印章の家へ置いていかにないように、テリピヌの怒り、罪、腹立ちも同じように無力な状態になるように。

§20

テリピヌは怒っている。彼の心と[魂]は燃える火のようだ。この火が消されるように、(彼の)憤慨、怒り、そして腹立ちも同じように[消されるように]。

§21

テリピヌよ、憤慨を静めよ。怒りを捨て去れ。腹立ちを静めよ。[そして]水路(の水が)逆流しないように、テリピヌの憤慨、怒り、腹立ちも同じように戻ってこないように。

§22

神々はサンザシの木の下で会議の場に(座っていた?)。そしてサンザシの木の下で長い[]。そして全ての神たちは(そこで)座っている: パパイア、イシトウシタイア、運命の女神たち、母神たち、ハルキ、ミヤタンズィバ、テリピヌ、守護神、ハパンタリ、[そして]。我は長年[](サンザシの木の下)にいる神々を招待していた。彼らを清めた。

§23

テリピヌの[体にある]害悪を[取り払った]。彼の[憤慨]を取り払った。彼の怒りを[取り払った]。彼の[罪悪]を取り払った。彼の腹立ちを取り払った。[悪い]言葉を取り払った。彼の害[悪]を取り払った。

15 行中の一部が欠損、それに続く行ではサンザシの木に関する部分を説明している。

§24a

[]そして[]

§24b

[牛はそなたの後ろを通る。] そしておまえは[その]毛のひと巻きを切る。羊はそなたの後ろを[通る]そしておまえはその毛の束を切る。テリピヌからも憤慨、怒り、罪悪をそして腹立ちを切れ。

§25

嵐の神はかんかんに怒ってやってくる、しかし嵐の神の男は彼を止める。鍋が煮え立つ(運ぶ)、そしてそれを柄杓が止める。同じように私死人の言葉がテリピヌの憤慨、怒りそして腹立ちを止めるように。

§26

テリピヌの憤慨、怒り、罪悪そして腹立ちが行ってしまうように。家はそれを手放すように。中の...それから救われるように。窓がそれから救われるように。町の門がそれから救われるように。門がそれから救われるように。王の道がそれから救われるように。(真っ暗な)地下の太陽神の道へそれが行ってしまうように。

§27

門番は7つの扉を開けた。7つ(の扉)の門を引いた。真っ暗な地上の下で青銅製の palji の容器がある。カバーは鉛でできている。取っ手は鉄製である。中に入った物は二度と出ることはできない。中でなくなる。だから彼らはテリピヌの憤慨、怒り、罪悪そして腹立ちを捕まえるように、そして彼らはここへ二度と来ないように。

§28

テリピヌは家に戻った、そして国の重要性を理解した。濃い霧は窓から去った。煙は家から去った。祭壇は再び神々と調和した。炉は切り株を放棄した。囲いの中の羊たちを彼は自由にした。牛舎の牛たちを彼は自由にした。その後母親は子どもを世話した(子どもと関わった)。羊は子羊を世話した。め牛は子牛を世話した。そしてテリピヌも王と王妃を<世話した>。生活、力そして長寿の問題で(すべての)これらのことを考えた。

§29

テリピヌは王のことを考えた(彼の重要性を理解した)。テリピヌの前には eia(植物名)の木が生えている。eiaの木には羊(の皮で作られた)獵師用の袋が掛けてある。袋にはよく太った羊(のシンボル)がある。葡萄と穀物(よく太った動物たちのシンボル)がある。長い年月と子孫がある。

§30

子羊の甘い(穏やかな)便りがある。そこには...がある。そしてそこには...がある。右足がある。豊作、豊穰、満腹がある。

この先破損が激しく解読不能。

さて、まずはこの物語に登場する神々について詳しく見ていきたい。具体的な呼び名をもって登場するのは、テリピヌ、嵐の神、太陽神、ハンナハンナ、カムルシェバ、ハパンタリ、パパイア、イシトクシタイア、運命の女神たち、母神、ハルキ、ミヤタンズィバ、守護神、の14神である。

このうちハッティ起源とわかっているのは主人公テリピヌとミツバチを送ったハンナハンナの2神。テリピヌは豊穰神(または植物・農耕の神)で、配偶神はここには登場しないがハテピヌという。なお、ヒッタイトの条約文書では神の名を上げて誓いをたてるということが行われていたが、その際この神の名も並べられた(Karauğuz 2001)。ハンナハンナは豊穰の女神で、全ての神の母の称号をもつ。

これに対し、地域を越え幅広く信仰されていたのがテリピヌの父親である嵐の神、太陽神、ハルキである。嵐の神は天候神、戦いの神としての性質もそなえ、フリではテシュブ、ハッティではタル、ヒッタイト象形文字ではタルフ、タルフナ、タルフント、ヒッタイト楔形文字ではメソポタミアの天候神アダドのイデオグラムによって表記された。なお、フリ系のテシュブの息子はシャルマであるが、シャルマとテリピヌが同一視されることはない。太陽神はバビロニアのシャマシュに相当する神である。彼はヒッタイト世界における最高位の裁判官(長)であり、ブライスによれば実在した全てのヒッタイトの王族のうち、半数以上が太陽神に語りかけたという(Bryce 2002)。ハルキはシュメルの子サバに当たる穀物の女神で、ハッティ語はカイトウである。

その他カムルシェバは占いの女神で、ここではテリピヌの怒りを鎮めるための儀式を執り行っている。ハパンタリは神々の家令を務め、この神話では祭儀の補佐の役割を担う。

つづいて神話の内容を検討したい。テリピヌに限らず、「姿を消す神」の神話では、姿を消す神が誰であろうとも、神がなんらかの理由によって怒り、姿を消す際に国の豊穰を持ち去るという共通のモチーフに従っている。これらの神話は姿を消した神を連れ戻す儀式の中で詠まれたのだろう。この神話がいつ詠まれたか、つまりこの神話が詠まれる儀式が行われていた時期については議論が分かれている。丸田はこの神話が農耕と結びついた性格を多分にもっているとして、ヒッタイトの新年祭(春の祭)と関連付けることに対して肯定的な見解を示している(丸田 1978)が、ディンチョル氏は、この

儀式で詠まれた文の冒頭に「クリヴィシュナの町の嵐の神を“家の主人”(= 神殿の神官?)は、秋でも収穫の時期でも、冬でも、いつであっても祝福したとき…」と記された文書の存在を指摘し、この記述からこの儀式は季節に関するものではないと主張している(Dinçol 1982)。もちろん「クリヴィシュナの町の嵐の神」も姿を消す神の1人である(註12)最後に、§28、29について触れておきたい。家に戻ったテリピ又は「国の重要性」、「王の重要性」を理解し、「王、王妃の世話をした」。これらは言うまでもなく、王の権威を高めるためになされた記述であろう。ヒッタイトの王はエジプトのそれと異なり、自らが神となるのではなく、神のための儀式を執り行う義務と「権利」をもった存在であったといえる。

4-2. フリ起源のクマルビ神話

ここでもあらずじから紹介したい。最初に天上で王であったアラルは9年後にアヌにその座を奪われる。しかしアラルの血を受け継ぐクマルビがそのまた9年後にアヌに戦をしかけ、勝利する。クマルビは逃げるアヌを追って、彼の性器に噛み付き、精液を飲み込む。それによってクマルビはアヌの呪いのかかった神を妊娠し、嵐の神を産む。嵐の神はクマルビに戦いの準備をし…ここで文書は欠損しているが、嵐の神が勝利したことは物語の後半といわれる「ウルリクンミの唄」を読めば明らかである。ウルリクンミは、その後クマルビが岩と契りを結び、もうけた息子の名である。クマルビは全身が岩でできたこの息子に嵐の神への復讐を託す。彼は日増しに成長して嵐の神を脅かすようになり、嵐の神は苦戦を重ねる。ここでも最後の部分の欠損がはげしく、詳細は不明であるが、最後には知恵の神エアの助けをかりて、嵐の神がウルリクンミに勝利し、その覇権が確立したと推測される(岡田・小林 2000)。ただし、前半のクマルビ神話と後半のウルリクンミの唄は、物語の冒頭の前置きのようなものがそれぞれ述べられており、各々独立した神話として議論されている(轟 1978)。よってここではクマルビ神話のみを扱う。

クマルビ神話全訳(註13)

§1

最初の(昔の)神々は[]、有力な神々は聞くように：ナ[ラ、ナブシャラ、ミンキ](そして)アムンキ！アムメツザンドゥが聞くように！

§2

[]と[]イシハラ之母と父が聞くように！[下で]上で力を持つエンリルとニンリル、有力な神々[]と[]彼らが聞くように！以前アラルが(天空では)王であった。アラルは王座に就いていた。そして神々の筆頭の神である、強力なアヌは、(召使いとして)彼の側にいた。彼は(アラルの)足に隠れ、酒の杯を(彼が)飲むために彼の手に渡していた。

§3

アラルは天空で満9年のあいだ王であった。9年目にアヌはアラルに対する鬪争(戦い)に着手し、アラルに勝利した。彼(アラル)は彼の前から逃げ、暗闇の地へ降りた。彼は下へ、暗闇の地へ行った、そしてアヌは彼の王座に就いた。アヌは王座の上に座っていた、そして強力なクマルビは彼の酒を渡していた。(クマルビは)彼の足に隠れ、酒の杯を(彼が)飲むために彼の手に渡していた。

§4

丸9年の間アヌは天空で王として留まった。9年目の年にアヌはクマルビに対して鬪争(戦い)を起こした。アラヌの孫(子孫)であるクマルビは、アヌに対し(ある)戦いを挑んだ。(アヌは)すでにクマルビに力及ばず、アヌはクマルビの手と足から抜けて逃げた。アヌは天上へ出た。(しかし)クマルビは彼の後ろを走った。アヌの足を捕まえた、そしてアヌを天上から地上に引きずりおろした。

§5

(クマルビはアヌの)膝に(腰の下に)、そして青銅に似た腹についた“男性器”に噛み付いた。クマルビはアヌの精液を飲み込むと、喜び、そして大きな声で笑った。アヌは戻って、クマルビ<へ>(次のように)話し始めた：「私の精液を飲み込んで本当に喜んでいるのか？」

§6

「断じて喜んではならぬ！私はお前に胎児(子孫)を宿した。まず高貴なる嵐の神とお前の子をはらませた(妊娠させた)。2つめは耐え難いアランザフ川とお前の子をはらませた。3つめは高貴なるタシミシュとお前の子をはらませた。3つの恐ろしい神を私はお前に種として植え付けたのだ。(また)来い！タッサ山の岩場に頭を打って終わるのだ。

§7

アヌは話し終わると天上へ出て、姿を隠した。賢者、王であるクマルビ(飲み込んだものを)口から吐き出した。彼は口から唾(?)[と精液]の混ざったものを吐き出した。クマルビの吐き出したものはカンズラ山[に落ちた。] 恐るべき[]。

§8

クマルビは悲鳴をあげながら(?)ニップルの町へ行った[]。彼は高貴なる王座に就いた。クマルビは[] - しない]。(あるものが)年月を[数える]。7つめの月が来た、そして彼の中にある力強き[神々]。

§9

[]クマルビを...彼から[]体から出よ！または彼の理性から出よ！あるいは彼の良い所から出る！

§10

嵐の神は(クマルビの)体内から、クマルビへ次のように話し始めた：「知恵の泉の主よ、あなたが長く生きるように！もし私がここから出たならば...[]。地上は力を私へ与えるだろう(?) 天上は勇猛さを私に与えるだろう。アヌは男らしさを私に与えるだろう。クマルビは賢明さを私に与えるだろう。最初の[]私に与えるだろう。ナラは[]私に与えるだろう。彼は[]与えた。エンリルは力を(?), []、威厳をそして聡明さを与えるだろう。そして彼は、心の全てを[]与えた。そして魂の[]][欠損]

§11

私へ[]。シャワリヤトウ[]。もし彼が私に与えるならば、彼は私に[]。

§12

アヌは喜び(?)はじめた。「...来い...」。私は恐れた。おまえは[] するだろう]。来い。彼らは他の女たちのように彼を...するだろう。同じように出るのだ！[]口から出よ！...出よ！もち望むのであれば「良いところから」出よ！」

§13

エアはクマルビの体内へ次のように話し始めた：[]食べる...もしお前のために私が(お前を)出したら(?), 彼は葦のように私を粉々にするだろう、もしお前のために私が(お前を)出したら[]私をひどく汚すだろう。[]私の耳の上を汚すだろう。もし私が(お前を)「良いところへ」出したなら、[]女[]私の頭の上へ私を(?)...するだろう。彼は中で...した。彼は石のように割れた。クマルビは彼から離れた。英雄、王、神 KA.ZAL は彼の頭から外へ出た。

§14

彼は行くとき、(KA.ZAL は)、エアの前で止まった、そして彼に敬礼した。クマルビは[]から落ちた、(色が?) 変化した。[クマ]ルビはナムへを探した。彼はエアに次のように話し始めた。「子どもを私にください。彼を食べてしまおう。[]。私のために女を[]。私はテシュブを食べ、殺してしまおう。私は葦のように彼をばらばらにする。」エアは彼の前で[]][]、彼は知りながらそれを集めた[]。クマルビは[]。天空の太陽女神は彼を見始めた。[]クマルビはそれを食べ始めた。玄武岩はクマルビの口を、歯を[傷つけた(?)]. 彼の歯は[]して、クマルビは泣き(悲鳴をあげ)はじめた。

§15

クマルビは[]した。]そして彼は次のように話し[始めた]:「私は誰を恐れていたのだ?[]クマルビは[]のように[]した。クマルビへ彼は次のように話し始めた：「[]石を呼ぶように！それを[]座らせるのだ！彼は玄武岩を[]中へ投げつけた。(次のように言う):「このあと彼らを呼ぶように！[]英雄たち、裕福な者たちは[羊たちそして]牛たちをおまえのために切るように！貧しい者たちは[精麦を]お前のために捧げるように！」クマルビは口から[]ために、誰も[]しないだろう]。クマルビは(次のように)語った。[]。ある[]彼を見た。彼らは国の下と上を[]]。

§16

[裕福な者たちは牛と羊を]切り始めた。[貧しい者たちは]精麦を捧げ始めた。[]「]し」始めた。彼らは(破れた)服を(繕った)ように頭にくっつけた(?) []。彼(嵐の神)は彼(クマルビ)から離れた。英雄テシュブは良いところから出た。

§17

運命の神々は[]。そして彼らは(破れた)服を(繕ったように)、彼の良いところに[(つけて)閉じた(?)].

[] [] [] が出た。彼らは(産婆の)女のベッドのような[] 彼を産ませた。彼らはカンズラ山の(誕生の)ためにクマルビを準備させて(?)、彼らは彼を(カンズラ山を)産ませた。[そして]英雄が出てきた。[]彼はよいところから出てきた。[彼が息子を]見たとき、アヌも非常に喜んだ(?)

第2段落の終わりは欠損

§18

アヌ[] []我々は洗おう[]。[]。さらに彼らの真ん中で[] [] []洗おう。[]のよう
にナムへを消して(滅ぼして)しまおう。[クマルビは[]]したとき、彼の言ったことは[]。おまえはクマル
ビを倒せるか?[] []我が王位に[]クマルビを[]。誰が我々のためにテシュブを倒すといのか?そし
て彼が成長(?)した時、彼らは別の誰かを[]するだろう。[]本当に[]放棄するだろう。[]知識の泉、
主人であるエアは、彼を放棄しろ![]テシュブは[この言葉を聞いて]、悲しんだ。[テシュブは]牛のシェリへ次
のように言った。

§19

[「さあ、誰が私]に対して戦いを挑むのだ? [いま私に誰が]勝つことができる?クマルビでさえ[私に対し(?)]反抗できま
い(?)]。エアは[]息子と太陽神[]さえ[]。私は王座から(?) [] - した]とき、クマルビを(?)降ろ
させた。彼を呪った[]。戦いの神をも呪った、そして彼をバナビの町へ連れて行った。もはや誰が私に戦いを
しかけるというのだ?」

別の行ではテシュブのお付の牛シェリが、他の神々を呪うことの危険性を彼に警告する。

§20

牛のシェリは、テシュブへ次のように答えた:「ご主人様、なぜ彼らを[呪うのですか?]ご主人様はなぜ神々を[呪うので
すか?]そしてまたなぜエアを呪うのですか?」[エアは]あなたのおっしゃったことを聞くでしょう。違いますか?
[]大きいです。ガニメットの国ほどに大きいのです。あなたの為に力[]。[]が来るでしょう。
あなたは(自分の)首を(?)取り外すことはできないでしょう。[次のように]言う:[]知恵(?) []エア

以下 20 行破損部分あり。

§21

[]の国の[]。彼は[]手放さねばならない!その眉を[]]しなければならぬ。彼は銅(と)金
の[]] - しなければならぬ。

§22

エアはその言葉を聞くと、心から悲しんだ。そして、エアはもう一度神タウリ(?)へ次のように話し始めた:「私に呪い
の言葉をかけるな!私に呪いの言葉をかける者は私を呪う。[この呪いを(?)]私に繰り返しかけるお前は、私を呪ってい
るのだ!皿の下に火が置かれた(?)そして皿は煮立ってふきこぼれるだろう(?)」

第3段落の終わり

第4段落の始め、40 - 50 行の欠損あり。

§23

6ヶ月经ったとき、荷車[]。荷車の“雄々しさ”は[] だった。荷車は[アブザワの町へ]後ろへ[]。「知恵
の[泉、主]エアはやるうとしていることを知っている」彼(エア)は(月を)数えている:ひと月、ふた月、3ヶ月が過ぎた。
4ヶ月、5ヶ月、6ヶ月が過ぎた。[7ヶ月]、8ヶ月、9ヶ月過ぎた。そして10ヶ月目が[やってきた]。10ヶ月目に大地の

神々は陣痛にあえぎ[始めた]。

§24

大地が陣痛であえいでいる時[]、彼は男児を出産した。使者が(神々の王へ知らせに)向かった。そして[神]、王は[王位を承知した。[]すばらしい言葉を(述べた)[]。大地は 2 人の男児を産んだ。エアは言葉を[聞いて]、[彼は]口頭で(?)使者[]と神 []、王は贈物を[]。(王は彼のために)立派な織物[を与える]。[]銀で飾った神官の服[]、肩掛け[]。

§25

クマルビの詩の 1 枚目の文書は終わっていない(?) ズィタの弟子ワルシヤの<偉大なる>子孫、LAMA.SUM の子孫、[]- タッシュの息子アシハ[パラ](の手によって)書かれた。文書は以前のものから私が写し取ったので、アシハ[パラ]、(我が上官)ズィタの監督のもと新たに書き直した。

4-1 にならないうちで登場する神を確認しよう。ナラ、ナブシャラ、ミンキ、アムンキ、アンメツザンドウ、エンリル、ニンニル、アラル、アヌ、クマルビ、タシミシュ、シャワリヤトウ、ナムヘ、嵐の神、戦いの神、シェリ、エア、タウリ(?)の 18 神である。このうち、ナラ、ナブシャラ、アムンキ、アンメツザンドウについてはアラルが天上の王になる以前から存在していた神であったと考えられるが、物語の中ではほとんど何の役割ももたない(轟 1978)。フリ系の神はクマルビと、嵐の神お付きの牛シェリ(この名はフリ語で「昼」の意)のみで、その他の神の殆どはメソポタミアの神々である。クマルビはバビロニアのエンリル神に相当するといわれるが、ここではエンリルは別個の神として登場している。そのエンリルは、メソポタミア神系譜の最高神の一人で大気神、ニップルの町の守護神である。実際クマルビは妊娠したあと、悲鳴をあげてニップルの町へ向かっている。ニンニルは彼の配偶神、先のテリピヌ神に登場したハルクキニサバの娘とされる。エアは水と知恵の神、ニップルを含め、メソポタミアの主要各都市に神殿をもつ。ここでは「知恵の泉」と形容されている。戦いの神はザババといい、フリではこれがアシタビと同一視された。なお、訳の中にはテリピヌと KA.ZAL も登場する。これらは轟氏の訳では、嵐の神もあわせて「天候神」とされており、物語の流れから考えても同一の神であろう。ここではカラウーズの訳を尊重してそのまま載せた。

メソポタミアの神々が多く登場することから、このフリ起源の神話がシュメル・バビロニアの影響を大きく受けて成立したことは間違いない。しかし全体的な内容に類似した神話を見出すことはできず、むしろ天上の覇権をめぐる争いはギリシア神話との類似が指摘されている。確かにアラルに相当する神は出てこないが、アヌをクマルビが追放し、嵐の神がクマルビにとって代わるという順序は、ウラノスをクロノスが討ち、クロノスをゼウスが倒すという物語とよく似ている。ギューターボックはクマルビ神話が、シリア海岸から地中海を經由してギリシアに伝わったと説明している。ただし、天上の覇権をめぐるクマルビ神話は、天地創造神話としての性格が希薄であることも指摘されてきた。天上の覇権をめぐる争いに敗れた神が自分の子どもに復讐を託すというモチーフはむしろ、ハッティ起源の怪竜イッルヤンカの神話(註 14)に類似しているといえる(轟 1978、p.349-351 を要約した)。

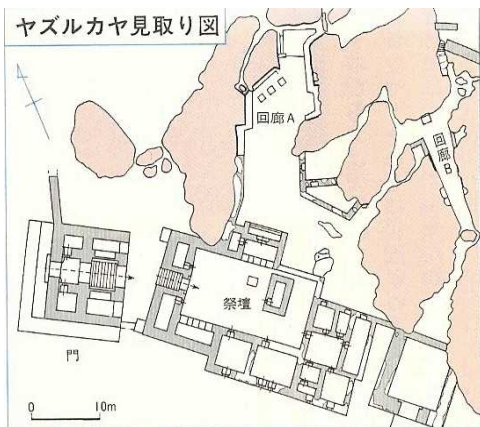
テリピヌの神話でもクマルビの神話でも、それぞれ起源とする民族固有の神は意外と少なく、逆に嵐の神や太陽神など特定の地域性をもたない神や、メソポタミア起源の神の存在が目立つ。また、姿を消す神の神話では、テリピヌの代わりに嵐の神が姿を消す版も存在することを考えると、2 つの神話はともに嵐の神の力、権威を示していると解釈できる。怪竜イッルヤンカの神話も、イッルヤンカに嵐の神が勝利する話であるから、これも同様に考えられる。

5. 神々のレリーフ 岩の神殿ヤズルカヤ

ヤズルカヤには主に新王国時代後期にヒッタイトで信仰されていた神々のレリーフが刻まれている。ここではレリーフによって具象化された神と神殿の機能を説明し、そこに現れるフリの影響と王の役割について検証したい。

5-1. 遺跡の構造と描かれた神々

ヤズルカヤとはトルコ語で「描かれた岩」を意味する。その名の通り、この遺跡の岩場にはヒッタイトで信仰されていた多数の神々のレリーフが刻まれており、「岩の神殿」と形容される。レリーフ群は主に新王国時代後期のハットゥシリ 3 世からトゥットハリヤ 4 世にかけて造られたと考えられている。都ハットゥシャから北東に約 2km と近いが、古代名はいまだわかっていない。



【図1 (渡辺 1998、p.317 より転載)】

遺跡の構造は大きく分けて A 室 = 回廊 A と B 室 = 回廊 B、祭壇址と門址の 4 つである(図 1)。A、B 室ともに自然の岩壁を利用したもので天井はない。A 室には岩壁前面に行進する神々の像が描かれている。西側の壁には主として男神が、東側の壁には主として女神のレリーフが刻まれ、それぞれの最高神が行列の先頭に立ち、北の壁でお互いに向き合う。また、東側にはこの遺跡最大のヒッタイト皇帝トウトハリヤ 4 世のレリーフ像がある。いっぽう B 室には、東壁にシャルマ神に抱かれるトウトハリヤ 4 世(図 2)西壁には 12 神の行列、冥界の神ネルガルのレリーフが存在する。これらは各々に独立したものであり、相互に関連性は見られない。



【図 2 (Seeher2002、p.150 より転載)】



【図 3 (Seeher 2002、p.127 より転載)】

こうした多種多様なレリーフのなかで、ここでは神々の系譜が見て取れる A 室のレリーフ(図 3)について詳しく見ていきたい。西側の男神のレリーフ群は冥界の 12 神の行列から始まる。B 室により良好な状態のものが見られるが、男神はみな様に丈の短いスカートをはき、前方に角のついたトンガリ帽を被って、右手に鎌形の剣を持っている。彼らの前を行く山の神々の長丈のスカートとフリルの広がり方は山と泉を象徴とされる (Seeher 2002)。その後正体が明らかになっていない神々が続くがしばらく行くと、ピシャイシャイ神とネルガルと表記された神が登場する。ネルガルは冥界の神である。そして彼の隣には雄牛の後ろ足・臀部と、人間の胴・腕をもった生き物の像が 2 体並ぶが、彼らは天空の雄牛、フリとシェリであると考えられ(Seeher 2002)、「地」のシンボルの上に立ち、「空」のシンボル(横たわる三日月)を掲げている。以降、軍神ザババ(=ヘシュエ)、プリンキル、守護神、軍神アシタビ、太陽神、月の神、ニナッタ、クリッタ、シャウシュカ、知恵の神エアが北に向かって一列に並ぶ。このうちシャウシュカはフリの女神であるが、メソポタミアのイシュタルに相当する愛と豊穡の神である。ニナッタとクリッタはシャウシュカの従者とされる。シャウシュカはこの男神の行列で唯一の女神である。



【図 4 (Seeher 2002、p.133 より転載)】

A 室の奥、北面では男神と女神、それぞれの行列の先頭が出会う(図 4)。男神の行列の続きから見ていくと、山を表す円錐形の土台に立った神のレリーフが 2 体並ぶ。これは天空神テシュブの父、クマルビ神とハツティの天候神である可能性が高い(Seeher 2002)。そして男神の行列の先頭で、山の神ナンニとハツズの肩の上に立つのが、天候神テシュブである。テシュブと向かい合う形で女神の行列の先頭、豹の上に立つヘパトはテシュブの妻で太陽女神である。ヒッタイト人は彼女を「アリンナの太陽女神」と同一視した。彼女の後ろで同じように豹の上に立ち、手綱を握っているのがテシュブとヘパトの息子のシャルマ神で、彼は女

神の行列で唯一の男神である。後ろに続く双頭の鷲の上に立つ2体のレリーフはテシュブ、ヘパトの娘アラズと、テシュブの孫娘とされる。

北面の主群像が終わると、今度は東側の岩壁面に女神の行列が続く。フテナ、フテッルツラ、アラットウの3神が並び、次の2神は正体不明、シャルシュ、タブキナ、ニッカルと続いて、その後の9体の神の名はわかっていない。タブキナは知恵の神エアの、ニッカルは月の神の妻である。女神の行列の後、やや南西向き岩壁面にはトゥトハリヤ4世のレリーフがある。

5.2. ヤズルカヤの機能

ヤズルカヤの機能については、早くから(註15)新年祭のための建物ではないかという説が唱えられてきた。文書からヒッタイトもバビロニア、アッシリアと同様に新年(=春)の始まりを盛大に祝っていたことが知られているし、ヤズルカヤが町の神殿と異なり、全くの平屋であったことから、この岩の神殿が一年のうちの特定の、限定された時期だけに利用されていたことが考えられる(ピッテル 1991)。このようにヤズルカヤが、神々が集う新年祭で使用された可能性は十分考えられ、A室に描かれた壮大な神々のレリーフ群からもそれは妥当な推測だと思われる。

ただし、この推測を確定するにはいくつかの問題点がある。まず、ヤズルカヤに言及する文書がいまだに発見されていないことだ。首都ハットゥシャから約2kmという近さにも関わらず、遺跡の古代名すら不明のままである。粘土板文書のほとんどが宗教関連のもの(小野 2000)といわれるヒッタイトにおいて、新年祭が行われるほどの神殿について、まったく記述がないというのは考えにくい。また、ヒッタイトの春を祝うプルリ祭は、ネリクの町を中心に行われていたことがわかっている。カシュカ族がネリクを支配していた時代には、別の場所で代替的に開催されたが、ハットゥシリ3世以後の時期には実際にネリクの町で開催された。さらに発掘調査の結果、この聖所は新王国期に墓地としても利用されていたことがわかっている。ピッテルはB室のネルガルと12神のレリーフから、少なくともB室は本来冥界に関わる場所であり、そこがトゥトハリヤの葬祭殿であった可能性を指摘している(ピッテル 1991)。また、前1500年頃を境にヒッタイトの土器が急増し、また同時期にA室の前に壁が築かれたことがわかった。いっぽうA室のレリーフ群が刻まれたのはハットゥシリ3世の時代から(Akurgal 2003)と考えられているおり、ヤズルカヤの場所自体はレリーフ像が彫り込まれる以前から神聖な場所とみなされていた可能性が高い(ピッテル 1991)のである。ヤズルカヤの遺跡は何らかの宗教儀式が行われた可能性は十分にあるものの、その用途に関しては今のところ推測に留まっているといえる。

5.3. ヤズルカヤにおけるフリの影響

A室の主群像に代表されるように、ヤズルカヤに描かれている神々は基本的にフリ系の万神殿の神である。新王国期になるとこうしたフリの影響は顕著に現れ、新王国時代は「古王国の王朝とは別系統に属し」「実際にはフリ人がアナトリアの支配者になったといえる」(小川 1997)と主張さえ存在する。

確かに「国家に関わる神のほとんどがフリ系になっていた(岡田・小林 2000)」新王国期の状況は一見異常な事態に見える。しかし、レリーフに刻まれた神一つひとつを見ていくと、ひとくちにフリ系といっても、それはフリを通してヒッタイトに伝えられたメソポタミア起源の神であったり、古代オリエント世界全体で信仰されていたものが意外と多いことに気づくだろう。ヒッタイトで古くから信仰されてきたアリンナの太陽女神は、フリのヘパトと同一視されたが、それはアリンナの太陽女神がヘパトに取って代わられたわけではない。ハットゥシリ3世の妃、ブドゥヘパの祈禱文には「我が女神、ハッティの国の女神、天と地の女王、アリンナの太陽女神へ。…あまねく全世界の女神、この国ではアリンナの女神とお呼びするが、かの杉の国ではヘパトという御名をお持ちでいらっしゃる女神へ(岡田・小林 2000)」と述べられている。このように、ヒッタイトでは新しい神を受け入れたとしても、それに同一視される神は「千の神々」のリストから消されてしまうことなく、そのまま信仰され続けていた。むしろ新たな名が加えられたことによってその神の権威が高まったような印象さえ受ける。

5.4. ヤズルカヤと王の役割

ヤズルカヤのレリーフ群は、新王国時代後期のハットゥシリ3世から息子のトゥトハリヤ4世の時代にかけて造られたとされている。ハットゥシリ3世の妃ブドゥヘパは最高女神ヘパトの最重要聖地の1つ、キズワトナの出身であり、もとは神官の娘であった。ブドゥヘパはハットゥシリ3世の妻として、またトゥトハリヤ4世の母として、かなりの権力をも

ち、ヤズルカヤのレリーフ群の建設にも深く関わったと考えられている。一説にはブドゥヘバは自らをレリーフ群の最高女神ヘパト、夫のハットゥシリ3世をテシュブ、そして息子のトゥハリヤ4世をシャルマに例えようとしたのだと言われている(Akurgal 2003)。もしそうだとしたら、それは明らかに自らを神格化する行為であり、それまでの「神自身ではなく、神に祈りを捧げる義務と権利を持つ存在としての神」としてのヒッタイトの王の性格とは異なるものである。さらに息子トゥハリヤ4世のレリーフについては、彼は山の上に立ち、丸帽にケープをまとっている。この丸帽にケープという格好は、ヒッタイトでは通常「死んで神格化された王」を意味する(註16)。この他にもシリアのラス・シャムラで発見された印影で、彼は高位の神の象徴である3つの角のついたトンガリ帽を被っていることから、トゥハリヤ4世は死後ではなく、存命中から自らを神格化していた可能性が高い(Akurgal 2003)。このことから、ヒッタイトにおける王の役割、権威に変化があったことはほぼ確実といえる。こうした変化がこのとき初めて起こったのだとすれば、カディシュの戦い以後交流が深まったエジプトの影響や、異民族の侵入や勢力争いによる国力の低下によって王の威厳を高める現実的な必要性があったことなどに理由を求められるだろう。ただし、この変化が起こった時期については明らかではない。

結論

ハッティとフリの影響がヒッタイトの宗教分野にどのように現れているのか、またそれがどのように変化していったかを明らかにすることがこの論文の大きなテーマであった。民族、信仰という長期的な変化を見るには、まずはヒッタイトが全体としてどのような歴史をたどったのか、その通史を把握する必要が生じた。第1章ではヒッタイト学がどのように生まれ、発展してきたかについて研究者を中心として述べ、第2章では、ヒッタイト史の時代区分を設定し、政治史としての通史をまとめた。ヒッタイトの歴史を王国史に限定せず、その範囲を広げたことで、ヒッタイトは原住民のハッティだけでなく、アッシリア商人の影響も大いに受けていたことが明らかになった。この事実は第4章でハッティとフリを厳別するのではなく、その背後のメソポタミアについて考えるきっかけとなった。

第3章ではクズルウルマックから北シリアにかけてのヒッタイト領内にいた異民族に直接焦点をあてた。ここでは第4、5章では扱わなかったカシュカについても触れた。詳しく取り上げることができなかったが、異民族全てがヒッタイトと友好的な関係を築いていたわけではなく、むしろそういう民族、国家が多くあったことを確認できた。

第4章ではハッティ起源とフリ起源の2つの神話を取り上げ、それぞれの神話に登場する神やあらすじの比較を行った。それによってどちらの神話でも、民族固有の神々よりもむしろメソポタミアに起源をもつ神々が多く登場していることが判明した。そしてどちらの神話も内容は「嵐の神の力、権威」を裏付けるものであることが確認できた。

そして、第4章で明らかになったこの2つの点は、第5章のヤズルカヤ遺跡においてもすぐに確認することができた。嵐の神の力、権威は、A室の主群像のテシュブを見れば明らかである。またフリ神々のパンテオンとして語られるヤズルカヤだが、細かく見ていくと、実はこれもメソポタミア起源あるいは、メソポタミア各地で信仰されてきた神が非常に多く、またフリ系といっても名前や性質が明らかになっていない神も多いことがわかった。新王国時代のヒッタイトの「フリ化」の意味自体についても再検討する必要がある。フリ化という言葉はそれまで信仰されていた神が、フリのそれにとって代わられるような印象を与えるが、実際はフリ神が受容されることで(それまでの神が消えてしまうのではなく)、筆者はむしろ権威を高めたのではないかと考える。最後に、神と最も深く関わる存在である王の役割に焦点をあて、神に祈りを捧げる義務と権利を有する存在であった王が、自らを神格化させたことで役割が変化したことを指摘した。この変化が起こった時期を明らかにすることを今後の課題としたい。

註

1. Keilschrifturkunden aus Boghazköi の略号
2. Hethitisches Wörterbuch の略号
3. The Hittite Dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago の略号
4. 渡辺氏は中王国時代をテレビヌからシュッピルリウマ1世(前1530-前1330年ごろ)までと規定しているが(渡辺1998)、大城氏は中王国時代をトゥハリヤ2世からハットゥシリ2世まで(前1450-1380)、新王国時代をシュッピルリウマ1世以降としており、中王国時代の時代区分に関しては研究者の間でも意見が分かれている。また、テレビヌの死後シュッピルリウマ即位以前の時代についてはいまだに不明な点が多く、歴史を再構成する段階にいたっていない。さらにシュッピルリウマ1世がヒッタイト王の息子であり、また彼の息子が即位していることから、シュッピルリウマ1世の前後で時代区分を分けるのは不適切である。以上の点から本稿では中王国時代を設定しないこととする。
5. カニシュは今日のキュルテペ、カイセリ市の北東約20kmに位置する。また、後のヒッタイトの首都となるハットゥシャにもカールムが置かれていた。

6. 彼の父祖としてトゥットハリヤの名が挙げられている。王位に就いた事実は確認されていないが、このラバルナの父祖トゥットハリヤを1世とし、新王国時代のトゥットハリヤをそれぞれ2世、3世、4世とするのが一般的である。
7. 彼に関して「一タバルナ(ラバルナ)ハットウシャの王、クッシャラの王、彼は王としてハットウシャの国を支配している。」(Gurney 1973,236)という記述がある。クッシャラ王朝とハットウシャの王朝の間には関連性があると考えられている(Dinçol 2004)
8. 彼はヒッタイト法典を集成したことで知られる。
9. この戦いののち、彼はシリア支配を重視して都をハットウシャからシリアに近いタルフンタッシャに移したが、息子のムルシリ3世は再び都をハットウシャにもどした。
10. 厳密な年代定義はされていないが、一般的な理解からいって、古ヒッタイトは古王国時代、帝国時代はシュッビルリウマ1世以降の時代を指していると考えられる。
11. karauğuz(2001)をもとに邦訳した。
12. そのほか、嵐の神、太陽神、ハンナハンナなども姿を消す性質をもつ。
13. Karauğuz(2001)をもとに、轟両氏の訳(轟 1978)を参照して邦訳した。
14. 怪竜イッランカの神話は、イッランカに敗れた嵐の神が、復讐のために息子をイッランカの娘のもとへ婿入りさせて、かつて奪われた心臓と目を取り戻し、かつての力を回復した嵐の神がイッランカを退治する、あるいは嵐の神が他の神々の力を借りて宴会を催し、イッランカを泥酔させて動けなくなったところで退治する、2種類のストーリーがあり、版によっては「嵐の神」の代わりに「テリピヌ神」が登場する。この神話は春の訪れを祝うプルリ祭の儀式に用いられ、冬を象徴するイッランカを嵐の神が退治することによって春が訪れるとされた。
15. 1918年にハインリッヒ・ツェルメンは、ヤズルカヤはバビロンやアッシリアで知られているピイトウ・アキイトウ、つまり「新年祭の建物」ではないかとの説を唱えていた(ピッテル 1991)。
16. ヒッタイトの文書では王が亡くなった時、「神になった」と表現された。

文献目録

岡田明子・小林登志子

2000 『古代メソポタミアの神々』、三笠宮崇仁監修、集英社

小川英雄・山本由美子

1997 『世界の歴史4 オリエント世界の発見』、中央公論社

岸本通夫・伴康也・富村伝・吉川守・山本茂・前川和也

1989 『世界の歴史2 古代オリエント』、河出書房新社

紺谷亮一

1999 「ヒッタイト帝国成立の背景」、『歴史人類』No.27:95-125

轟俊二郎

1978 「クマルビ神話」、筑摩文学大系1『古代オリエント集』、筑摩書房

ピッテル、クルート

1991 『ヒッタイト王国の発見』、大村幸弘・吉田大輔訳、山本書店

前田徹・川崎康司・山田雅道・小野哲・山田重郎・鶴木元尋

2000 『歴史学の現在 古代オリエント』、山川出版社

丸田正数

1978 「テリピヌ伝説」、筑摩文学大系1『古代オリエント集』、筑摩書房

吉田大輔

2003 「ヒッタイト-アナトリアが生んだ古代オリエント世界の強国」、『トルコ三大文明展』: 178-181、日本放送協会

レーマン、ヨハネス

1979 『ヒッタイト帝国 消えた古代民族の謎』、内野隆司・戸叶勝也訳、佑学社

渡辺和子

1998a 「アッシリアとフリ人の勢力 - 前二千年紀前半の北メソポタミア」、『世界の歴史1 人類の起源と古代オリエント』: 254-271、中央公論社

1998b 「国際関係の時代 - 前二千年紀後半のオリエント世界」、『世界の歴史1 人類の起源と古代オリエント』: 272-324、中央公論社

Akurgal, Ekrem

1998 *Anadolu Kültür Tarihi*. Ankara: Tübitak.

Alp, Sedat

2001 *Hitit Çağında Anadolu*. Ankara: Tübitak.

Bryce, Trevor

2001 *Life and Society in the Hittite world*. New York: Oxford University Press.

Dinçol, Ali M.

1982 *Hititler. Anadolu Uygarlıkları, Görsel Anadolu Tarihi Ansiklopedisi*, I. İstanbul: Görsel Yayınlar.

2004 *Hititler Son Tunç Çağı. Arkeo Atlas 3*: 22-59.

Hırçın, Selen

2000 *Çivi Yazısı*. İstanbul: Eskiçağ Bilimleri Enstitüsü Yayınları.

Hooke, Samuel H.

1991 *Ortadoęu Mitoloęisi*. Ankara: İmge Kitabevi.

Karauęuz, Güngör

2001 *Hitit Mitoloęisi*. Konya: Çizgi Kitabevi.

Özgüç, Tahsin

2004 Assur Ticaret Kolonileri Kültepe-Kaniş. *Arkeo Atlas* 3: 10-17.

Seeher, Jürgen

2002 *Hattuşu Rehberi Hitit Bařkentinde Bir Gün*. İstanbul: Ege Yayınları.

2004 Hattuşu Hititlerin Bařkenti. *Arkeo Atlas* 3: 62-69.